

近代ロシア文学形成期における啓蒙と「感傷」 — O.П.コゾダヴレフの手法をめぐって

金沢友緒

はじめに

近代ロシア文学において、センチメンタリズムの重要な性質ともいうべき「感傷」、すなわち〈他者、自然、見聞きした出来事に心を動かされる能力〉を美化し、評価する傾向は既に 18 世紀半ば、В.И.ルキンの喜劇『愛によって矯正された浪費者』（1765）や Ф.А.エミーン『エルネストとドラーヴラの書簡集』（1766）の中に芽生えていた。しかし、「感傷」を描写する作品や文学的手法としての「感傷」の美学を語る文章が数多く登場するのは Н.М.カラムジンの『哀れなリーザ』を初めとするロシア・センチメンタリズムの代表作が発表された 1780 年代末から 1790 年代にかけてであり、雑誌《趣味、理性、感情のための読み物（Чтение для вкуса, разума и чувствований）》（1791-1793）が発行され、И.И.ドミートリエフ、М.Н.ムラヴィヨフ等の感傷詩人としての活躍が目立っていくのも 1780 年代後半以降であったのだ。ロシア・センチメンタリズムについてのこうした理解は今日まで П.Н.ベルコフ、П.А.オルロフ、Н.Д.コчеткова¹等の先行研究の蓄積によって築き上げられてきた。当然ながら研究の多くはセンチメンタリズム最盛期を対象としていたため、最盛期に先行する 1780 年代前半の作家達の個々の活動については未だ明確になっていない点が多かった。しかし、近代ロシア文学におけるセンチメンタリズムの役割を知るためには、最盛期だけではなく、この文学思潮が登場した事情を精査することが不可欠である。本論文はこの点を念頭に置き、最盛期に先行する 1780 年代前半の文学動向を明らかにすることを目的としている。

1780 年代前半の文学動向を調査する際に注目されるもののひとつは、国家事業にも参加した知的エリートの役割である。当時はフランス革命に代表される西欧での社会的変動の影響を受けてエカチェリーナ 2 世の保守化が顕著になる前の時代であり、国家主導のもとに西欧の学問と文化が積極的に受容され、多くの知的エリートが政府の文化事業に参加していた。外国で教育を受け、幅広い視野と教養を備えたこうした知的エリート

¹特にロシア・センチメンタリズム文学を研究課題としたものとして、本論文を執筆するに際して以下の 2 点を参照した。

Орлов П.А. Русский сентиментализм. М., 1976.

Кочеткова Н.Д. Литература русского сентиментализма. Эстетические и творческие искания. М., 1994.

には文学活動の一翼を担った者もいて、近代ロシア文学形成過程における重要な風景を構成している。彼らにとっては、ロシア国内の教育啓蒙こそ緊要の課題であり、「感傷」もまた啓蒙の問題との関わりの中で模索されたのである。

1780年代前半のロシア文学に見られる「感傷」の性格を考察する際に、貴重な手がかりを提供している人物の一人が O.П.コゾダヴレフ (1754-1819) である。コゾダヴレフはエカチェリーナ 2 世時代から 19 世紀初頭のアレクサンドル 1 世時代に至るまで、政治・教育・経済の分野で多くの国家事業に貢献し、常に国民の教育・啓蒙について心を砕いた人物であった。彼は女帝に命じられてライプツィヒ大学へ留学し、西欧で幅広い知識と視点を獲得し、1780年代後半の文学思潮の流行を準備する上で大きな貢献を果たしてきた。

しかし残念なことに、エカチェリーナ女帝、政府の代弁者として捉えられるがゆえに、その文学的功績の詳細については明らかにされてこなかったのである。

しかし例えば本論で扱う作品の一つ、コゾダヴレフの『心地よき旅』(1783)は『19世紀前半の文学史』²の中で、「《ロシア語愛好家達の対話者》の中で最初のロシアのセンチメンタル・ジャーニーを描いたものであり、まだ規模は小さいながらもセンチメンタリズムのジャンルとスタイルの特徴を含んだ作品」と指摘されており、コゾダヴレフの文学が、センチメンタリズムの歴史において果たした役割の大きさが窺える。よってコゾダヴレフは初期センチメンタリズムを支えた人物として興味深い分析対象であり、彼の仕事を近代ロシア文学形成のプロセスに位置づけることは、重要な課題である。

本論文ではコゾダヴレフが 1780 年代前半の文学活動の一環として編集に携わった雑誌《ロシア語愛好家達の対話者》を取り上げ、彼が、この雑誌に発表した関連し合う 3 つの作品の中で啓蒙をどのように演出したかを考察する。この作業を通して、近代ロシア文学におけるセンチメンタリズム形成のプロセスを理解するための新たな手がかりを提示できると考える。

1. O.П.コゾダヴレフと雑誌《ロシア語愛好家達の対話者》

1-1. オシップ・ペトローヴィチ・コゾダヴレフ

作品の分析に移る前に、本論を進めるにあたって重要と思われるコゾダヴレフの伝記的背景について簡単に説明したい。彼を対象とする先行研究はきわめて少ないが、19世紀末に M.И.スホムリノフがロシア科学アカデミーのメンバーの一人であったコゾダヴレフについての網羅的な伝記を発表しており、³彼の生涯についての大まかな情報を提供し

² История русской литературы в 10 томах. Т. 1. М.-Л., 1941. С. 73.

³ Сухомлинов М.И. История российской академии наук. Т. 6. СПб., 1882.

ている。オシップ・ペトロヴィチ・コゾダヴレフは 1754 年にサンクト・ペテルブルグに生まれ 1819 年に同市で没した。本考察にあたって特筆すべきは、彼がドイツへ留学した知的エリートだった点である。幼少期に両親を亡くして幼年士官学校に通っていた彼は、エカチェリーナ 2 世から選ばれ、1769 年から 1774 年にかけてドイツのライプツィヒ大学で法学、文学、哲学等を学んだ。彼の留学時代に関しては A.IO.アンドレーエフ著のドイツにおけるロシア人留学生に関する研究を参照した。⁴

各国の留学生に向けて門戸が開かれていたライプツィヒ大学で、コゾダヴレフはドイツのみならずフランスやイギリス等西欧の先進諸国の学問に接する機会も与えられ、この時期に彼の豊かな教養と広い視野が養われたと言ってよいだろう。1774 年に帰国後、彼はロシア科学アカデミーに所属し、女帝の事業であるロシア語辞書編纂に参加し、国民学校委員会や裁判顧問の仕事をごなし、大学教育システムの素案を提出する等、国家事業に関与する機会が増えていく。アレクサンドル 1 世の時代には新設の内務省の官吏に任命され、晩年の 10 年間は官報新聞と言われる《北方郵便、または新サンクト・ペテルブルグ新聞》(1809-1819)の発行に従事した。

彼は文学活動にも積極的であった。彼の主な文学活動は 1770～80 年代に集中しており、ロモノソフ作品集編纂(第一巻のみ)、J.W.ゲーテ(1749-1832)の悲劇『クラヴィーゴ』(1774)やドイツ詩人 M.A.トゥムメルの『ヴィルヘルミナ』(1764)の翻訳、ドイツやフランスの演劇の翻案他、創作も発表している。

1-2. 18 世紀後半にみる「感傷」志向と雑誌《対話者》におけるコゾダヴレフの活動

本論で取り上げるのは 1780 年代前半についてであるが、それに先行する時代のロシアの文学的動向としては、ロレンス・スターンの『感傷旅行』(1768)やゲーテの『若きウェルテルの悩み』(1774)、1770 年代の J.J.ルソーの感情教育に関する著作の登場を機に、西欧で「感傷」への関心が高まり、それがロシアにも伝わる中で、国内でも「感傷」を扱った M.M.ヘラスコフの頌詩や A.T.ボロトフ(A.T. Болотов)の『キリスト教徒の感情(Чувствования христианина)』(1781)が登場したことが挙げられる。とはいえ、これらはまだ単発的な出来事で点数も少なかった。

コゾダヴレフの《対話者》に先行するロシアの雑誌としては、1770 年代末に発行されたノヴィコフの月刊誌《朝の光(Утренний свет)》(1777-1780)が重要であろう。⁵こ

⁴ コゾダヴレフ及び当時ドイツ留学したロシアの知的階層に関する資料は以下を参照した。

Андреев А.Ю. Русские студенты в немецких университетах XVIII-первой половины XIX века. М., 2005.

⁵ *Утренний свет*, ежемесячное издание. Ч. 1-9. СПб.; М., 1777-1780.

れはフリーメイソンの思想を反映した哲学的宗教的性格の強い雑誌として知られているが、同時に、この雑誌は理論的な観点から感情を取り上げており、A.B.ザパドフが18世紀雑誌研究の中で指摘しているように、ロシア・センチメンタリズムの理論的根拠としての役割を果たすことになった。⁶しかし、《朝の光》に掲載されたのは人間の精神的な苦しみを描いたE.ヤングの『夜想』（1742-1745）や、ルソーと並んでロシア・センチメンタリズムの理論的支柱となったC.F.グラートの感傷的訓話の翻訳等、西欧、特にドイツの作品が多く、まだ当時のロシアは個人の感情教育の支柱を西欧の著作に求めていることがわかる。⁷

それに対して、その数年後に出版された《ロシア語愛好家達の対話者（Собеседник любителей российского слова）》（1783-1784）はやはり人間の感情や感受性の意義に注目した雑誌であったが、こちらには収録作品を全てロシア語のオリジナルで揃えるという方針が掲げられていた。本誌は1783年から1784年にかけて発行された全16号の月刊誌で、女帝の庇護下に置かれており、編集の中心はE.P.ダーシュコヴァが担い、女帝自身も寄稿していた。扉絵にはエカチェリーナ2世を表す女神ミネルヴァが描かれていた。この雑誌にはG.P.デルジャーヴィン、M.H.ムラヴィヨフ、И.Ф.ボグダノーヴィチ、M.M.ヘラスコフ等数多くの作家が参加し、掲載されたのはロシア語の論文、寓話詩、叙情詩、諷刺詩で、女帝が手がけた『ロシア史に関する覚え書き（Записки касательно российской истории）』にも多くの頁数が割かれた。コゾダヴレフはダーシュコヴァとともに共同編集者として作品の選考に携わりながら、自身の作品も幾つか発表している。創刊号の序には、同誌には翻訳は掲載されないことが明言されており、⁸あくまで母国語の創作で揃えるという方針のもと、時には《ペテルブルグ報知（Санкт Петербургские ведомости）》

⁶ Западов А.В. Русская журналистика XVIII века. М., 1964. С. 157.

⁷ 18世紀後半 ロシアのフリーメイソンに関しては以下の研究を参照した。

Вернадский Г.В. Русское масонство в царствование Екатерины II. Петроград, 1917.

Блудилина Н.Д. Западноевропейское просвещение и русские масоны : отражение их философии в литературе 1760-1790-х гг. // Россия и запад : горизонты взаимопознания. Т. 3. / Под ред. А.И. Чагина. М., 2008. С. 631-665.

なお、《朝の光》とフリーメイソンの関係については次の研究が詳しい。

Кочеткова Н.Д. Немецкие писатели в журнале Новикова «Утренний свет» // Н. И. Новиков и общественно-литературное движение его времени. / Под ред. Г.М. Макогоненко. Л., 1976. С. 113-123.

⁸ 創刊号の序の中では、読者からの作品も募集されている。また投稿原稿の条件として外国語で出版された作品の模倣か、ロシア語のオリジナルの作品であることが課されており、「どのようなものであれ、ここでは翻訳は掲載されていないし、今後も掲載されない予定である」ことが記されている。Предуведомление // Собеседник любителей российского слова, содержащий разные сочинения в стихах и в прозе некоторых российских писателей. Ч. 1. СПб., 1783. С. 3-4.

(1728-1917)等に発表済みの作品の中から《対話者》の方針に合ったものを選び、転載する工夫も行われた。⁹

これまでコゾダヴレフについては、共同編纂者としての役割のみが注目されることが多く、作家としての試みは明らかにされてこなかったと言ってよいだろう。しかし、共同編集者という立場にあったからこそ、コゾダヴレフは自らこの雑誌の中でロシア語のオリジナル作品を発表することに使命感を抱いていた。彼の作品の考察は彼の編集者としての立場を理解するためにも不可欠であろう。¹⁰

彼は《対話者》誌において、新たに注目度の高まりつつあった「感傷」が人間の成長にとってもつ意義を、自らの作品を通して読者に伝えようとした。彼のこの狙いが最も端的に表れているのが、本論文で取り上げる3つの作品である。

この3作品は別々の時期に掲載されたが、互いに切り離せない関係にあり、一種の連作として捉えることができる。創刊号に発表された『心地よき旅』はコゾダヴレフの「感傷」をめぐる構想と物語全体の枠組みを示したもので、これら3作品のうちで中心的な役割を果たしている。この作品に描かれた「感傷」をめぐる主題の補足として機能したのが、6号に掲載された詩『クレリー』（1783）と7号の詩『わが友へ...』（1783）である。

以上を踏まえ、まず雑誌掲載年代順に作品を取り上げて、考察を試みたい。¹¹

⁹ 《対話者》については19世紀後半にドブロリューボフが評論を書いている。

Добролюбов Н.А. Собеседник любителей русского слова // Собрание сочинений в 9 томах. Т. 1. М.; Л., 1961. С. 182-278.

また、ステンニクは《対話者》に関してロシア語の語彙に関する問題を以下の論文で取り上げている。*Стенник Ю.В. Вопросы языка и стиля в журнале «Собеседник любителей русского слова» // XVIII век. Сб.18. / Под ред. Н.Д. Кочетковой. СПб., 1993. С. 113-130.*

なお、コチェトコヴァは同雑誌に度々掲載されたロモノソフの詩を巡るエカチェリーナ2世の意図について考察を行っており、その中でコゾダヴレフを〈エカチェリーナ2世の意図をよく理解した人物〉として言及している。

Кочеткова Н.Д. Отзывы о Ломоносове в «Собеседнике любителей русского слова» // Литературное творчество М.В. Ломоносова: Исследования и материалы. / Под ред. П.Н. Беркова. М.; Л., 1962. С. 270-281.

¹⁰ 彼は後の論文『ヨーロッパの国民教育に関する考察』（1785）の中でも、啓蒙と教育を国民（народ）の母国の言葉によって実施することの必要性を主張しており、ここにコゾダヴレフによる母国語教育啓蒙文学への意識の高さを改めて確認することができる。

Козодавлев О.П. Рассуждение о народном просвещении в Европе // Растущий виноград, ежемесячное сочинение, издаваемое от главного народного училища города святого Петра. 1785. Месяц август. С. 2-3.

¹¹ 掲載作品を考察するに際しては、ロシア文学研究所（プーシキンスキー・ドム）所蔵の《対話者》原本を使用した。

Собеседник любителей русского слова, содержащий разные сочинения в стихах и в прозе некоторых российских писателей. Ч. 1-16. СПб., 1783-1784.

2. 3つの「感傷的」作品

2-1. 『心地よき旅』（«Приятное путешествие»）における感傷的語り手の「私」

《ロシア語愛好家達の対話者》の創刊号に掲載された『心地よき旅』¹²には「К.....вь」と署名されている。作者がコゾダヴレフであることは明らかであった。

作品は、恋に破れて旅の途上にある語り手の「私」の物語の中に、「私」が旅先で出会った「ある屋敷の主人」の美德と悪徳をめぐる体験談が嵌め込まれるという構成をとっている。この体験談の中で、「主人」は知り合いの「富豪」の悪徳が露見する場面に立ち会い、憐憫を覚えたことを回想する。

スホムリノフは、『心地よき旅』の主題を〈屋敷の主人の美德の行為〉と〈冷酷な富豪の悪行〉の対比に見ており、¹³これは彼が嵌め込まれた「主人」をめぐるエピソードにのみ注目したためと考えられる。しかしながら、実際に「主人」が遭遇した事件が語られ始めるのは物語の半ばであり、その体験談を聞いた後の「私」の独白も考慮すると、「主人」をめぐるエピソードが物語の中心となっているわけではなく、物語の主演、すなわち作者が描写したかったのはあくまでも旅人で語り手の「私」であったと考えるべきであろう。

なお、ロレンス・スターン『感傷旅行』（1768）で既に知られていたように、この『心地よき旅』では「旅」は単なる空間移動ではなく、「私」の内的成長の物語をも意味していた。すなわち、『心地よき旅』は〈美德の勝利〉の物語ではなく、〈失恋で傷心の「私」が、旅先で感傷的な人物と出会い、美德の体験談を聞くことで精神的成長を遂げる〉様子を描いた物語なのである。以下で、そのプロセスがどのように演出されているかをいくつかの場面を取り上げて確認したい。まず、物語の冒頭では旅人の「私」が日没時に変化していく自然の風景に魅了される場面が詳細に描かれる。水面が銀の鱗のようにさざめく湖や入り日に染まる森の佇まいを目にして、「私」は、「なんと心地よい眺めだろう！ 感じやすい心にとって、なんとという快感であろう！（Какое приятное зрелище! какое услаждение сердцам чувствительным!）」「私はこの上なく甘美な感情に浸っていた、すなわち他のいかなる満足をも凌駕する感情に。（Я был наислачайшим чувствованием

¹² Козодавлев О.П. Приятное путешествие // Собеседник любителей русского слова. Ч. 1. СПб., 1783. С. 39-53.

¹³ スホムリノフは《対話者》に掲載された『ズベニゴロドからの読者の手紙、1783年6月20日付』を元に、雑誌の主要な目的を〈美德と悪行を対比しながら描写することによって美德の精神を読者に認識させる〉ことにあったと捉えていた。Сухомлинов. История российской академии наук. С. 326. なお、この『読者の手紙』は、実際のところ雑誌編集者達が書いていた可能性が高い。Собеседник любителей русского слова. Ч. 2. СПб., 1783. С. 9-10..

— чувствованием всякое другое удовольствие превосходящим.) 」と賛辞を繰り返した。¹⁴

ここでは「美しい」ではなく、「心地よい」や「甘美な」という言葉が使用され、それらは眼前に広がる自然の外観というよりは、鑑賞者の「私」の心の状態を強調するものとして機能している。賛美の対象となっているのは一見「自然」であるようだが、実は「私」の心の状態、すなわち感傷的になれる自らの資質であった。

やがてこの「感傷」は自然美が与える幸福な時間ではなく、過去の恋についての悲しい記憶が「私」の中に呼び覚ました時間へと引き継がれていく。

その時私の想像の中に、素晴らしいクレリーの気高い魂に有頂天になったあの時間が蘇ってきた。彼女についての記憶が私の傷ついた心を揺さぶり……涙が両目から流れ出て、私は完全に恍惚状態に陥り、ただもうクレリーだけを感じるのだった。¹⁵

「私」が「クレリー」の名を口にするのは物語の中でこの場面だけである。この「クレリー」という語は、17世紀フランスのサロン人にして女流作家のスキュデリー嬢の小説『クレリー』（1654-1661）を想起させるために用いられた可能性が高い。

スキュデリーの『クレリー』は、古代ローマ出身のクレリーがエトルリアと母国の戦争の中で敵陣へ人質として送られながらも、他の人質を救い出してローマへ無事帰還させる、という英雄伝に題材を借りながら、内容においては17世紀フランス社交界の〈愛のモラル〉を説いた小説である。特にヒロインのクレリーが作中で描いてみせた「愛の地図（*La Carte de Tendre*）」¹⁶はフランスのみならず西欧の読書界で大きな反響を呼んだ。

ロシアの知識層であれば『クレリー』を原典で読んでいたのみならず、N.ボワロー『詩法』（1674）の中で『クレリー』を批判する文章にも出会っていただろう。また1752年にはB.K.トレジャコフスキーによってボワローのロシア語訳もなされている。¹⁷このようなスキュデリー『クレリー』のロシア受容の背景を踏まえると、『心地よき旅』の「私」が口にした「クレリー」は実際の恋人の名としてではなく、スキュデリーの

¹⁴ Козодавлев. Приятное путешествие. С. 40.

¹⁵ Там же. С. 41.

¹⁶ スキュデリー『クレリー』に関する研究については以下を参照した。

James S. Munro, *Mademoiselle de Scudéry and the Carte de Tendre* (Durham: University of Durham, 1986).

『クレリー』のロシア語翻訳は18世紀に手記の形で出回っており、その際に『クレリー』は以下のタイトルで発表された：«Римские кавалеры и дамы»: история о соединенной компании и о любовных разговорах римских кавалеров и дам Марцеллюси и Клеллии и прочих.

これについては以下のアーカイブを参照した：

РНБ (Российская национальная библиотека), ф. XV. № 29. Скороп. XVIII в., 227 л.

¹⁷ Пигарев К.В., Фридендер Г.М. Третьяковский // История всемирной литературы. Т. 5. / Под ред. С.В. Тураева. М., 1988. С. 366-367.

『クレリー』を連想させる表象として用いられたものと考えられる。作者がこの表象を登場させたことの意味については次章で改めて取り上げることにしたい。

「私」が「クレリー」の思い出に耽っていたところへ「見知らぬ人物が通りかかり、私をこの心地よい状態（приятное состояние）から呼び覚ました」。¹⁸ 彼は近くの屋敷の主人であり、感傷的な性質の人物で、「私」を自宅へ招き、傷心の「私」の気を晴らそうと、自らの体験を話し始める。

話によると、かつて「屋敷の主人」が知人の富豪のところに招かれた時のこと、集いの場にひとりの未亡人が訪ねてきた。彼女の亡夫は生前この富豪を助けてやったことがあり、それを当てにして貧しい未亡人は子供達のために援助を請いにやってきたのである。しかし、富豪は冷淡に彼女を追い返した。「主人」は富豪の冷酷な仕打ちへの憤りを抑えながら、女性に密かにお金を渡して帰らせ、彼女が自分の子供達に会って感じるであろう喜びを想像して至福の思いにとらわれた。そして「主人」は体験を語り終えながら、非情な富豪に対して憤りと憐れみを感じたと述べるのであった。

こうして『旅』の冒頭部で「クレリー」の思い出に涙を流していた「私」は、「感傷」と「美德」の資質を備えた「屋敷の主人」と出会い、美德をめぐる体験とそれについての「主人」の言葉を聞いたことで心が満たされた。また、「私」は彼の家庭の光景が自らのうちに引き起こした感情について、「この感情はある情熱を私の胸にもたらし、その情熱は私の四肢の隅々にまで行き渡って、私の精神を人間的な儂さの上高くへと引き上げてくれる（Чувствование сие производит в груди моей некий пламень, разливающийся по всем членам моим, и превозносящий дух мой выше брэнности человеческой.）」¹⁹と述べている。

「美德の人（Созерцание добродетельного человека）を觀察し、「善行についての物語（Повествование о каком либо добром деле）」を聞くこと、すなわち教育によって、「私」は人生の悲哀に対処する術を見出したのである。²⁰

しかしながら、ここで注目されるのは、作者が、教育による人間的もろさの克服を重要としながらも、「傷心」や「感傷」については否定していない点である。「クレリー」の思い出によって傷ついた「私」の心は「心地よい状態（приятное состояние）」と呼ばれ、「感傷」は「美德」を理解するために不可欠な要素として描かれている。また、「感傷」は「美德」の実践においても有効なものと思われ、それは「主人」の描写において顕著に現れて

¹⁸ Козодавлев. Приятное путешествие. С. 41.

¹⁹ Там же. С. 52.

²⁰ Там же. С. 52.

いるといえるだろう。「主人」は「見るからに感傷的な心を持った人物（Вид сего пришельца возвещал человека, имеющего душу чувствительную）」²¹であり、「主人」のみならず妻子にも、「気高い魂（добродетельная душа）」が「繊細な心（нежное сердце）」に宿っていた。²²このように「私」や「主人」やその家族においても「感傷」的であることを強調する場面が随所で描かれ、「主人」は美德の人であるからではなく、感傷の人であることによって高く評価されているのだ。これは先の引用で、「主人」が「富豪」を非難するに当たって「非情な人間（нечувствительный человек）」と呼んでいたことと対照的であろう。「美德」と「不徳」の対比が「感傷」と「非情」の対比によって置き換えられているのである。

当時ロシアでは「感傷」の定義の1つとして〈悲しみの美学〉が紹介され始めていた。これは人間の内的葛藤、愛の苦しみを美しく心地よいものとして捉える姿勢であり、後にカラムジンが『哀れなりーザ』で〈悲しみの美学〉を作品化した。それ以前のロシアにおいても既に〈悲しみの美学〉を理論化する西欧の著作が紹介されていた。1781年にはA.M.クトゥーゾフがゲラートの論文『悲しみの喜びについて（Von den Annehmlichkeiten des Mißvergnügens）』（1747）を翻訳して《モスクワ月刊誌（Московское ежемесячное издание）》に発表している。²³当時〈悲しみの美学〉に対する関心が高かったことが窺われる。

コゾダヴレフは『心地よき旅』の中で主人公の失恋の痛みを克服すべきものとして描きつつも、同時にその痛みを「心地よさ」として受け入れ、また「感傷」を人間が「美德」へ至るまでに必要なものとして示した。こうして、書き手は意図的に、古典主義以前から長らく重用されてきた「美德」の権威を利用しつつ、この「美德」を獲得するための手段としての「感傷」を表舞台に引き出すことを試みたのであった。

²¹ Козодавлев. Приятное путешествие. С. 52.

²² Там же. С. 43.

²³ Московское ежемесячное издание. Ч. 3. М., 1781. С. 141-153.

なお、この作品は当初クトゥーゾフ本人の著作と見なされていたが、後にドイツの研究者 P.ブラングによってゲラートの作品の翻訳であることが判明した。

P.A. Brang, "A.M. Kutuzov als Vermittler des westeuropäischen Sentimentalismus in Russland (Zum Problem der Attribuierung anonymer Werke des 18 Jahrhunderts)," *Zeitschrift für slavische Philologie* 30:1 (1962), pp. 44-57.

なお、ゲラートはコゾダヴレフ、クトゥーゾフ、ラジーシチェフ等が留学したライプツィヒ大学で教鞭も執っており、ロシアからの留学生達に対して大きな影響を与えていた。

Сухомлинов. История российской академии наук. С. 23.

2-2. 詩『クレリー』（Стихи «Клелии»）と恋愛の感情

3 作の中で次に発表されたのは雑誌第 6 号掲載の詩、「初恋の情熱と苦しみ」を描いた『クレリー（Клелии）』²⁴であった。この詩では〈友愛しか知らなかった私の初めての恋〉という、具体的な行為が謳われている。

その頃私は情熱的な愛というものを知らず、
自分の友人達だけを愛していた、
しかし突然お前を見て——かわいそうな私！
私は自分の自由を失った。²⁵

上記の引用から、「私」の初恋が一目惚れの恋であることが読みとれる。「私」は一目惚れの恋に陶醉しながら、やがて思うようにならない苦しみの果てに、死への願いを口にすようになった。

おまえの眼差しは 叶わぬ望みで
不幸な私を魅了する、
私はあとで気づく、夢で
自分の心を惑わしているのだということに。
[中略]
何物も私を慰めず、
ただ死だけが私を魅了する、
私の至福はそこにある。
慈悲の手によって
死が私を至福へと誘う。²⁶

詩の中に「クレリー」の名は登場しないが、作者は大胆にも詩全体を『クレリー』と題することで、読者にここでもまたスキュデリー『クレリー』の愛のモラルを想起させようとした。詩『クレリー』の愛のモラルは『心地よき旅』の場合よりも具体的な形で利用されている。簡単に言及しておくとして、スキュデリー『クレリー』の愛のモラルでは、一

²⁴ Козодавлев О.П. Стихи Клелии // Собеседник. Ч. 6. СПб., 1783. С. 24-26.

²⁵ Там же. С. 25.

²⁶ Там же. С. 25-26.

目惚れは〈尊敬を伴う、友愛の延長にある愛〉に劣るものと見なされており、ヒロイン、クレリーの崇拜者たちの中で最終的に彼女との恋を成就するのも、尊敬と友情から徐々に信頼を勝ちとっていった男であった。

しかし、コゾダヴレフ『クレリー』では友愛の延長の恋愛ではなく、一目惚れから生じる〈愛の苦しみ〉が謳われ、そしてそこには〈悲しみの美学〉に基づいて〈苦しみの感情〉を受け入れる思想が再び登場している。コゾダヴレフの詩『クレリー』が『心地よき旅』との繋がりの中で読むべく設定されたのであるとすれば、そこにはスキュデリー『クレリー』とは異なった価値観、すなわち一目惚れを否定するのではなく、人間的成長の過程で受け入れるべき感情であるとする思想を読みとることができる。

ところで、詩『クレリー』が雑誌に掲載されたのは創刊号の『心地よき旅』発表から既に半年近くが経過した頃であった。『旅』が散文であったのに対し『クレリー』は詩の形式で書かれ、しかも後者には署名がなかった。おそらく、コゾダヴレフは1作目の中で「クレリー」の名を用いたことで2作目との連続性を読者に示唆できたと考えていたのであろう。

ここで一つ、興味深い事実を指摘しておきたい。次章で取り上げる3作目、第7号掲載の詩『わが友へ...』に、コゾダヴレフは「『心地よき旅』と『クレリー』の作者（Сочинитель «Приятного путешествия» и «Клелии）」という署名を付した。作者はこの署名によって、新たに発表した『わが友へ...』の作者が『旅』の作者であることを示しただけでなく、既に掲載済みの詩『クレリー』の作者もまた『旅』の作者と同一であることを明示した形となった。3作目の署名の中に『旅』だけでなく、『クレリー』も含めた背景には、全ての読者に詩『クレリー』と『旅』の関係を改めて確認させ、それによって『クレリー』における主張、すなわち一目惚れの恋がもつ肯定的な役割も明確化する狙いがあったのではないかと推測される。こうした一連の仕掛けには、これらの作品を構想した際の、コゾダヴレフの明確な目的意識と周到な計算が現れている。

2-3. 頌詩『フェリーツァ』の作者への返答詩『わが友へ...』（«К другу моему...»）と『心地よき旅』、『クレリー』の関係

3作目、《ロシア語愛好家達の対話者》の第7号に掲載された詩『わが友へ... К другу моему...』²⁷は、同誌の創刊号の巻頭に掲載された、エカチェリーナ2世への頌詩『フェリーツァ』の作者ムルザ（デルジャーヴィンを指す）に宛てた作品であった。そもそもデルジャーヴィンの『フェリーツァ』を評価し、他の作家達に紹介して《対話者》誌の巻頭に掲載するきっかけを作ったのは他ならぬコゾダヴレフであった。ここで頌詩『フェ

²⁷ Козодавлев О.П. К другу моему ... // Собеседник. Ч. 7. СПб., 1783. С. 40-44.

リーツァ』について簡単に述べておくと、この作品は、エカチェリーナ 2 世の教訓物語『皇子フロルの物語』（1781）²⁸ に登場する皇女フェリーツァを女帝に重ね合わせて、その美徳を讃えたものである。M.B.ロモノーソフの三文体に則った従来の荘重な頌詩とは異なり、低位文体と高位文体を合わせたスタイルを用いてフェリーツァ（エカチェリーナ 2 世）個人の日常生活を具体的に描写したこの詩は、新しいタイプの頌詩として注目された。²⁹《対話者》創刊号の巻頭に掲載されたこともあり、雑誌の参加者達も関心を持ち、『フェリーツァ』とその作者ムルザをめぐる返答詩が幾つも発表されたのである。

ゴゾダヴレフ自身もムルザの功績についての詩を残しており、そのうちの 1 つが『わが友へ...』であった。彼は『わが友へ...』の後にもうひとつの返答詩『聡明なるフェリーツァへ頌詩を書いたタタールのムルザへの手紙 Письмо к Татарскому Мурзе, сочинившему оду к премудрой Фелице』（1783 年、第 8 号）を発表したが、この『ムルザへの手紙』では『フェリーツァ』の登場人物を具体的に描写し、さらに詩人ムルザに対しては賞賛と次作への期待を謳っている。³⁰ それに対して、『わが友へ...』の作者の関心は詩人ムルザの情熱と苦悩にあった。

また、注目すべきは『タタールのムルザへの手紙』の署名が「O.K.」であったのに対して、『わが友へ...』の署名は「『心地よき旅』と『クレリー』の作者 Сочинитель «Приятного путешествия» и «Клелии»」だった点である。これは 2 つの返答詩、『わが友へ...』と『ムルザへの手紙』の主題が全く異なるものであること、『わが友へ...』は『ムルザへの手紙』とはなく、『心地よき旅』および『クレリー』と同じ構想のもとに書かれたことを示している。

²⁸ 王子フロルが「棘のない薔薇」を入手すべく、彼を愛した賢い皇妃フェリーツァの助言を得ながら試練をこなしていく物語である。

Екатерина II Сказка о царевиче Хлоре // Избранные сочинения императрицы Екатерины II. СПб., 1890. Т. 1. С. 39-53.

²⁹ デルジャーヴィン『フェリーツァ』については鳥山祐介訳を参照した。

鳥山祐介「デルジャーヴィン『フェリーツァ』試訳及び註」、『ロシア 18 世紀論集』（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室）第 2 号、2002 年、123-132 頁。

デルジャーヴィンの詩『フェリーツァ』及びその研究については以下を参照した。

Державин Г.Р. Ода к премудрой Киргизкайсацкой царевне Фелицу, писанная некоторым Татарским Мурзою издавна поселившимся в Москве, а живущим по делам своим в Санктпетербурге : переведена с арабского языка 1782 года // Собеседник любителей российского слова. Ч. 1. СПб., 1783. С. 5-14.

Державин Г.Р. Сочинения Державина с объяснительными примечаниями Грота. Т. 1. СПб., 1868. С. 92.

³⁰ 作者は以下のように呼びかけている：

Сколько дель, Мурза, безъ песней оставляешь! / Или добродетели ты славить не желаешь?

「どれほどのことを、ムルザよ、きみは歌わずに放っておくのだ！／それともきみは美徳を讃えたくはないのか？」 *Козодавлев О.П.* Письмо к татарскому Мурзе, сочинившему оду к премудрой Фелице // Собеседник. Ч. 8. СПб., 1783. С. 5.

それは「愛の苦悩」がもつ啓蒙的意義を提唱することであった。『クレリー』と同様、『わが友へ…』で描写されたのもまた片思いの愛がもたらす苦悩であり、前者では「私」の苦悩、後者では「友」の苦悩が謳われている。

きみの魂を支配し、
繊細な心を引き裂くのは
燃え上がる愛の情熱なのだ。
[中略]
この上なく甘い飲み物のように
愛は我々の心に流れ、
そして胸の中に自由に滑りこみ、
心地よさで血が騒ぐ。
しかし愛の魅惑は危険、
そして行き着く果ては不幸
我々哀れな人間にとって時としては。
互いの情熱を見出すことのかなわぬ者は
ただ不幸だけを感じ、
永遠に平安を失う。³¹

そして、片思いの不幸に囚われた「友」に対し、『わが友へ…』の「私」はこう助言する。

逃れよ、わが友よ、この情熱から、
弱さを退けよ。
そのときすべての不幸は消え、
平安の中に私はきみを見出すだろう。
雄々しくあれ、自らを抑えよ、
そして誠実な魂によって
自身の生涯を幸福なものにせよ――
しかしそれは願っても無駄なこと
夢に私の心が感わされているだけ
わが友よ！… きみはか弱い人間だ。³²

³¹ Козодавлев. К другу моему... С.41-42.

³² Там же. С. 44.

この詩で「私」は「友」が情熱を制御し、愛の苦しみを克服することを願いながらも、最後の3行には、そうした期待は無駄であることも暗示されている。

こうして、同じ著者が書いた1作目『心地よき旅』では、失恋の痛手を受けながらも、最終的にはそれを乗り越えた旅人の「私」が描かれたのに対し、3作目の『わが友へ…』の結末には「友」の「情熱の苦しみ」に対する「私」の諦め、あるいは理解する気持ちが表れている。この差異を説明する手がかりは、『わが友へ…』の冒頭の「私はリラを弾くことはできない」という表現³³の中に見出せるだろう。作者は続く詩行の中でも、「友」は選ばれた詩人であるが、自分（「私」）には詩人としての才能がないことを認めている。すなわち、作者は1作目で提示した〈感情の苦しみの乗り越え〉を教育の成果として評価しつつ、「友」の詩人としての在り方をも受け入れるべきものとしたのである。作者コゾダヴレフが愛の苦しみの克服を目指しながらも、多様な視点から苦悩がもつ意義を描写しようと試みていることがわかる。

コゾダヴレフは3つの作品の中で多様な角度から愛の苦悩をとりあげ、苦しみを「感傷」と結びつけることで、人間の成長に必要なものであることを伝えようとした。

ところで、3作品を連作として理解した場合に、一人の共通の語り手の「私」の物語が浮かび上がってくる。1作目の『心地よき旅』で、語り手の「私」は失恋からくる傷心を「屋敷の主人」の体験談を聞いたことで癒やし、内的成長を遂げた。2作目の詩『クレリー』では、その「私」の一目惚れの初恋と、叶わぬ恋の苦しみに死を願う心の動きが描写される。3作目の詩『わが友へ…』では、今度は「私」が詩人で友のムルザに恋愛の危険と片思いの苦しみについて説き、この苦しみから逃れるよう助言した。

3つの作品を同じひとりの「私」の物語と捉えた場合には、2作目の詩『クレリー』の中で描かれた「私」の悲恋が時間的に物語の最初に位置することになる。そしてその後、〈語り手の「私」が心の旅を通して愛の苦悩を克服し（第1作）、同様に愛の苦悩の最中にある友人に助言する（第3作）までになる〉という、「語り手」の成長のドラマが展開することになる。

このように3つの作品が連作としての構成をもつことによって、各々の作品における作者の意図がより明確なものとなっている。苦悩の乗り越え、すなわち人間の内的な旅の全体像を語る第1作『心地よき旅』との関係を前提とすることで、第2作『クレリー』、第3作『わが友へ…』において描写された恋の苦しみがまた人生の中に位置づけられ、積極的な意味を持ち始めることになり、苦悩は乗り越えることが望ましいが、人間の成長にとって不可欠であることもまた示されたのである。これは詩人というよりは

³³ Там же. С. 40.

教育家、啓蒙家としてロシア社会への貢献を目指していたコゾダヴレフならではの明確な目的意識を窺わせるものであった。

3. コゾダヴレフにおける啓蒙の手法

コゾダヴレフはただ「感傷」を無条件に、あるいは恣意的に賞賛したわけではなかった。既に述べたように、「美德」という権威との関わりの中で「感傷」の役割と意義を明らかにするという、きわめて用意周到な手続きを踏んだのである。

『心地よき旅』や『クレリー』で「クレリー」という表象が利用されたのもその証であった。もうひとつ具体例を挙げておきたい。『心地よき旅』の中で「屋敷の主人」が富豪の非情な振る舞いを嘆いたことについては既にとりあげたが、彼は自らの気持ちを次のように表現したのである。

この非情な人間 (нечувствительный человек) に対する忌々しさが落ち着くと、私はヴィーラントのディオゲネスと同様に、富豪に対する憐れみを感じたのです。³⁴

ここで「主人」が口にした「ヴィーラントのディオゲネス」は、1770年にドイツの作家ヴィーラントが著した『激怒するソクラテス、或いはシノペのディオゲネスの対話 (Sokrates Mainomenos, oder die Dialogen des Diogenes von Synope)』³⁵を指していると思われる。ディオゲネスは古代ギリシャの哲学者だが、ヴィーラントの『ディオゲネス』では富豪の貪欲と非道に苦しめられる人々のエピソードが屢々ディオゲネスの言葉と視線を通して描かれている。この作品はノヴィコフの《朝の光》(1778)に部分訳が掲載されており、³⁶当然コゾダヴレフの目にもとまったはずだが、ドイツ文学の愛読者であった彼はむしろ既にライブツィヒ留学時代(1769-1774)にこの作品をドイツ語で読んでいた可能性が高い。作者コゾダヴレフは読者に対し、「主人」の体験を〈非情な富豪と迫害された貧者〉を扱ったヴィーラントの『ディオゲネス』に即して理解することを求めたものと考えられる。

³⁴ Козодавлев. Приятное путешествие. С. 51.

³⁵ 同作品は 1795年に作品集に収録される際には『シノペのディオゲネスの対話摘録 (Nachlaß des Diogenes von Sinope Aus einer alten Handschrift)』と題された。本論文ではこの作品集の『ディオゲネス』を参照している。

C. M. Wieland, *Nachlaß des Diogenes von Sinope Aus einer alten Handschrift* // C. M. Wielands *Sammtliche Werke*, Bd. 13 (Leipzig, 1795), pp. 1-148.

³⁶ Виланд X.M. Отрывки из разговоров Диогена Синопского // Утренний свет. Ч. 3. М., 1778. С. 352-371.

コゾダヴレフが「クレリー」や「ディオゲネス」の名を引いたのは、《ロシア語愛好家達の対話者》誌の傾向に添うものであった。近代ロシア文学形成期においてギリシャ・ローマ古典崇拜は継続的に見られた傾向であり、《対話者》誌掲載の作品の中でもギリシャの神々は好んで用いられ、さらに、ミネルヴァはエカチェリーナ 2 世を表すモチーフとして多用されている。雑誌参加者の中では特にボグダノーヴィチや Д.И.フボストフがこうした西欧古典のモチーフを用いた諷刺詩、寓話詩、叙情詩の創作に熱心であった。

ところで、ロシアでのこうした傾向に拍車をかけたものの一つとして、ギリシャ・ローマ古典に題材を求めた、18 世紀後半すなわち同時代のドイツの作家達の文学活動が挙げられる。特にその代表的な存在であったヴィーラントはギリシャ・ローマ古典に題材を借りつつ、同時代社会の動向を描き、世相を諷刺的に捉える視点を有していた。³⁷ 既に述べたように、コゾダヴレフはライプツィヒ大学留学時代にドイツの文学・文化を学び、親しんだ。後年ロシアでドイツ文学を受容した読者とは異なって、ドイツにおける文学の動向を現場に身をおき、間近で目撃したのであり、その経験は帰国後の活動、文化的視点、創作手法に少なからぬ影響を与えたのである。

本論文で考察したように、コゾダヴレフの手法の特徴は、『旅』の中で「感傷」を描写する際に、ギリシャ・ローマ古典のモチーフを、フランスのスキュデリーとドイツのヴィーラントの作品を通して登場させた点にあった。このことによって、古典から直接引用する場合とは異なる効果が生まれた。18 世紀ドイツの哲学と啓蒙の作家ヴィーラントと、17 世紀フランスのサロン社会の〈愛のモラル〉を描いたスキュデリーを対比させることで、『旅』の物語の基調となっている「感傷」が複数の視点から理解されることになったのである。

カラムジンは、「名誉と家柄と富を愛する者は、『新エロイーズ』がないからという理由で、スキュデリー嬢の小説（『クレリー』のこと）を読む輩に似ている」³⁸ と皮肉を述べ、フランスの異なった時代の作家である 17 世紀スキュデリーと 18 世紀ルソーを対比させたが、コゾダヴレフの場合はスキュデリーのフランス文化とヴィーラントのドイツ文化を対比させたといえるだろう。ヴィーラントの思索的な奥行きをもつ作品は、コゾダヴレフにとってスキュデリーの『クレリー』とは一線を画すものであった。コゾダヴレフは作家であると同時に大学で哲学の教鞭をとってもいたヴィーラントに対して深い敬意を抱いていた。コゾダヴレフがヴィーラントの作品に学んでいたことは、《ロシア語

³⁷ ヴィーラントのロシア受容については以下の研究を参照した。

Данилевский Р.Ю. Виланд в русской литературе // От классицизма к романтизму: Из истории международных связей русской литературы. / Под ред. М.П. Алексеева. Л., 1970. С. 298-379.

³⁸ Карамзин Н.М. Письмо русского путешественника // Полное собрание сочинений в 18 томах. Т. 13. М., 2005. С. 350.

愛好家達の対話者》最終号に発表された彼の『夢 (Сновидение) 』（1784 年第 16 号）からも推測される。ここには当時ドイツのみならずペテルブルグでも流通していたヴィーラント編集の雑誌《ドイツのメルクリウス (Die Teutsche Merkur) 》(1773-1789) の影響が現れているのである。³⁹

終わりに

コゾダヴレフの文学活動には、異文化間の関係を通して主題を掘り下げようとする試みが数多く認められる。国家事業にも参加した知的エリートの、常に客観化、相対化によって自らの主張を正当化しようとする姿勢が反映されていた。

彼のこのような姿勢は帰国後の活動の随所に認められ、おそらくライプツィヒ留学が影響を与えた主な要因であった。ここで、そのひとつの例に簡単に触れておきたい。ドイツから帰国後の 1780 年、コゾダヴレフはゲーテの悲劇『クラヴィーゴ』(1774) を翻訳した。当時ゲーテ文学の中では『ウェルテルの悩み』が圧倒的な知名度を誇っていたにも拘わらず、コゾダヴレフがより知名度の低い『クラヴィーゴ』に関心を向けたのは、このゲーテの悲劇が、フランスの喜劇作家 P.A.C.ボーマルシェ (1732-1799) の自伝エッセイ『回想録』(1774) 中の英雄談を悲劇に書き換えた、「翻案劇」だったからであった。ゲーテはこの悲劇の中で、ボーマルシェのエッセイでは悪者だったクラヴィーゴの人物像を美化すると同時に、本来の主人公であったボーマルシェ本人の勇気と正義を滑稽化してみせた。ゲーテの翻案作業にはドイツ的視点から見たフランス文化が見事に映し出されている。『クラヴィーゴ』は物語よりはむしろ作者の視点が注目される、いわば異文化対立によって生まれた作品であり、この点で『ウェルテル』にはない魅力でコゾダヴレフを惹きつけたのであった。

《対話者》誌の 3 つの作品における「感傷」の描写にも、コゾダヴレフの多様な価値観への関心と理解は反映されている。そして、センチメンタリズムへの移行期の文学に登場したこのコゾダヴレフの「啓蒙の手法」は、当時の知的エリート達の文学への姿勢と深い関わりを持っていたと考えられ、そうした見通しは今後の課題へと繋がるであろう。近代ロシア国家の形成に貢献したコゾダヴレフの「啓蒙の手法」は文学の枠を超えて、近代ロシアの社会と文化を読み解く貴重な手がかりを提示してくれるのである。

³⁹ コゾダヴレフの『夢』には、《メルクリウス》に掲載された以下の作品と同一の表象が登場する。C. M. Wieland, "Die Aeropetomanie, oder Die Neuesten Schritte der Franzosen zur Kunst zu fliegen," *Der Teutsche Merkur* 4 (1783), pp. 69-96.

C. M. Wieland, "Clelia und Sinibald," *Der Teutsche Merkur* 4 (1783), pp. 97-120.

«Чувство» и просвещение в становлении новой русской литературы :
о поэтике О.П. Козодавлева

КАНАДЗАВА Томоо

В истории новой русской литературы сентиментализм активно развивался примерно со второй половины 1780 -х гг.

В наше время довольно многих крупных учёных, обращались к изучению литературного направления «русский сентиментализм».

Однако, изучены ещё не все произведения, посвящённые теме чувства и внутреннего мира человека, и опубликованные в первой половине 1780-х годов, то есть в период, который можно назвать подготовительным периодом русского сентиментализма.

Данная работа посвящена изучению русской литературы именно в первой половине 1780-х годов. При этом необходимо учитывать, что во второй половине 18 в. идеи Просвещения сыграли огромную роль в России во многих областях, в том числе, безусловно, в литературе. Так что вполне естественно, что растущий интерес русских писателей к теме «чувства» тоже тесно связано с идеологией Просвещения. Для выяснения отношения литературы к теме «чувства» и ориентации ее на идеи Просвещения, в данной работе мы обратим особое внимание на произведения одного из государственных деятелей этого времени – О. П. Козодавлева.

Осип Петрович Козодавлев был известен более как человек, который служил в правительстве и различных государственных организациях при Екатерине II и Александре I.

Стоит обратить внимание на то, что он был одним из тех студентов, которые отправились по указу императрицы в Лейпцигский университет для того, чтобы завершить образование (в том числе, например, А. Н. Радищев и А. М. Кутузов). Обучение и жизнь в Германии сильно повлияли на молодого Козодавлева, о чем свидетельствуют его сочинения, написанные после возвращения в Россию.

Хотя он как писатель занял скромное место в литературе он, особенно в молодости, внёс заметный вклад в историю русской литературы своего времени: он перевёл «Клавиво» И. В. Гете, участвовал в редактировании собрания сочинений М. В. Ломоносова и проч. Среди его занятий очень значима его работа в качестве редактора журнала «Собеседник

любителей русского слова». В этом журнале О. Козодавлев опубликовал несколько своих собственных произведений.

Мы анализируем три его произведения: «Приятное путешествие», стихи «Клелии» и «К другу моему...». Хотя они были опубликованы в разных томах этого журнала, мы считаем, что они составляют единый комплекс, так как написаны на одну и ту же тему – «чувство человека». Это подтверждает подпись в конце стихотворения «К другу моему...».

В рассказе «Приятное путешествие», опубликованном в первом томе журнала, читатели нашли главную идею автора - о *чувстве*. Козодавлев подчёркивает важность чувствительности человека, изображая его добродетельным персонажем.

Во втором произведении, в стихах «Клелии» изображено страдание первой любви.

Третье произведение, стихи «К другу моему...» были опубликованы как ответ на стихотворение Г. Р. Державина «Фелица»

Они все были написаны в 1783 году, когда еще было мало русских оригинальных произведений, посвященных теме чувствования. Проанализировав эти три произведения, мы можем предположить, что Козодавлев написал их, руководствуясь просветительской идеей, что страдание от чувств необходимо для развития внутреннего мира человека.

По сравнению с последующими чувствительными произведениями работы О. П. Козодавлева не очень значительны в художественном отношении, но они настолько характерны для эпохи, что их анализ позволяет разобраться в тесных связях между русским сентиментализмом и идеями Просвещения.